

1970 年前後における千葉県高等学校教育研究会保健体育部会の 保健科教育の取り組みに関する事例的研究 - 『保健と体育』(1967-1973) を手がかりとして -

近藤 雄大*

A Case Study of School Health Education Efforts in the Health and Physical Education Subcommittee of the Chiba Prefecture High School Education Research Association around the 1970s -Focusing on “*Hoken to taiiku*” (1967-1973)-

KONDO Yuta

The purpose of this study was to elucidate some aspects of school health education efforts of the Health and Physical Education Subcommittee of the Chiba Prefecture High School Education Research Association around 1970 as a case study. The results of this study show that the school health education efforts of the Health and Physical Education Subcommittee of the Chiba Prefecture High School Education Research Association around 1970 have attempted to enhance health education from multiple aspects: renewing educational content in response to social issues, building a training system that is in tune with on-site issues, and improving the quality of education through independent studies. These efforts can be seen as a model case of regional educational practice in school health education, aiming at a shift from “health as a subject” to “health education that is connected to students' lives and society.”

Key Words: Health Guidance, Health Learning, School Health Education, Health and Physical Education

1. はじめに

本稿は、千葉県高等学校教育研究会保健体育部会^{注1)}(以下、千葉高校保体部会と略す)が発刊した『保健と体育』(1967-1973)を手がかりとして、1970年前後における千葉高校保体部会の保健科教育^{注2)}の取り組みを事例的に明らかにすることを目的とする。

保健科教育を対象とした代表的な歴史研究として、七木田の研究¹⁾がある^{注3)}。七木田は、教科としての保健(衛生)を中心的対象に置きつつ、制度や政策といった社会システム(予測可能性の中を生きる空間)の成立を描いている²⁾。しかしながら、当該システム(制度・政策)は、稼働すべきメカニズム(実践)と相即するものである³⁾。すなわち、

戦後において、学校現場ではどのような保健科教育が展開されてきたのかを一方で解明しなければならない⁴⁾。

この課題に対してアプローチした研究としては、有間⁵⁾と近藤⁶⁾の研究がある。有間は健康教育のモデル学校、近藤は実験学校といった学校単位の視点からアプローチし、戦後における各学校の健康教育や保健科教育の具体的な様相や実践の変容について明らかにしている。有間と近藤の研究は、歴史研究において資料の発掘と整理が重要な研究課題であることを踏まえると、貴重な研究である。しかしながら、有間⁷⁾が課題に挙げているように、戦後日本における保健科の実践の全体像を明らかにするために、同時期に各学校を含む地域全体がどのような実践を展開し、いかなるプロセスを辿ったのかを検討していかなければならない。そのため、各学校の保健科教育の個別事例を蓄積しつつ、各地域の保健科教育の取り組みの事例を研究資料として整

原稿受付 令和7年8月11日

*総合理工学科 機械システム系

理・提示することは、戦後における保健科教育がどのように展開されてきたのかを今後さらに考究していく上で、重要な研究課題である。

この事端として、本研究では、千葉高校保体部会が1967年から1973年までに発刊した『保健と体育』に掲載された論考を対象として、1970年前後の千葉県という地域における千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みの一端を事例的に解明することを主眼とする。具体的には、まず、千葉高校保体部会の発足経緯と活動内容を整理する。次に、『保健と体育』(1967-1973)に掲載された保健科教育に関する論考を整理し、千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みを検討する。

岡崎は、「戦後保健科教育小史」と題して通史を編纂した際に、様々な保健科教育の研究的蓄積が不足している中でも、特に保健科教育の実践史が蓄積・整理されていないことを指摘している⁸⁾。本研究の成果は、岡崎の指摘した課題の解決に好個な資料を提示できると考える。一方で、教科教育学としての歴史研究は、資料をもって説明可能な結論の範囲に限定して研究目的を設定せざるを得ない⁹⁾。そのため、資料の限界上、1970年前後の千葉県における千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みに着目し、それ以外の年代、団体、地域等の取り組みについて言及できないことが本研究の限界点である。

2. 史料解題

2-1. 千葉高校保体部会の発足経緯

千葉高校保体部会は、1966年4月22日に発足した。当時の千葉県における保健体育科教育を取り巻く環境は、第1にクラブ活動、第2に教科指導であり、クラブ活動については、各種競技会を中心に強化策が打ち出されていたが、教科研究の面では、満足な体制ができてはいない状況であった¹⁰⁾。また、一部の保健学習指導者から保健学習の指導や研究は現状のままでよいのかという批判もあった¹¹⁾。そのため、千葉県高等学校体育連盟研究部によって組織的な体育学習の課題と現状の保健学習の課題について、数回議論がなされた。その結果、既に活動している千葉県高等学校教育研究会に高校の教科のほとんどが加入していることから、千葉県高等学校体育連盟研究部内での教科研究ではなく、千葉県高等学校教育研究会に加入し、新たに千葉高校保体部会を発足させ教科研究を実施することが望ましいという結論に至ったようである。具体的な発足経緯については、1966年2月の千葉県高等学校体育連盟代議員会の際に部会加入について提案し、3月の研究部会での千葉高校保体部会の規約案の作成・審議を経て、4月22日に体育科主任会議の承認を

得て発足した¹²⁾。初年度の千葉高校保体部会は、目標を趣旨の徹底と啓蒙活動の促進、研究体制の具体化、に設定し活動しており、その成果の1つとして『保健と体育』(1967年)が発刊された。会員名簿から確認できる千葉高校保体部会の会員数は、1967年度時点で459名であり¹³⁾、千葉県内において大規模な組織であったことがわかる。

一方で、千葉高校保体部会は、1972年に転機を迎える。1972年の終わりごろに、千葉高校保体部会は、財団法人日本学校体育研究連合会高等学校部会と関東地区高等学校保健体育研究会に所属することになった。所属することになった具体的な経緯については判然としないが、従来の全国高等学校保健体育研究会が、1972年10月12日の第11回全国学校体育研究会(福井市)の際に日本学校体育研究連合会高等学校部会へと名称を変更し、また1972年11月24日(箱根町)において関東地区高等学校保健体育研究会を結成したことで、これらの部会や研究会が各都道府県の部会によって組織されることになった¹⁴⁾。これに伴って、必然的に千葉高校保体部会もこれらの組織に所属することになったと考えられる。

地方から全国への組織的な発展を遂げた千葉高校保体部会は、1966年から1973年までにおいて、千葉県内の高等学校における保健体育に関する研究(体育科教育と保健科教育)の中心的な役割を担っていたといえる¹⁵⁻¹⁶⁾ 註4)。また、その活動と成果を資料として残しているのがこの時期に当会が継続的に発刊した『保健と体育』(1967-1973)であると考えられる。

2-2. 千葉高校保体部会の活動内容

千葉高校保体部会は、千葉県高等学校保健体育学習指導者並びに、会の趣旨に賛同するものから組織されており、千葉県高等学校保健体育指導者の資質の向上および保健体育の振興を図ることを目的として活動していた¹⁷⁾。千葉高校保体部会の事業内容は、保健体育に関する研究および研究発表、講演会・講習会の開催、そして本会の目的を達成するために必要な事項で構成されていた¹⁸⁾。例えば、1966年度の事業内容については、1966年9月27日体育研修会「体力を高める学習指導はどのようにしたらよいか」(東総工業高校)、11月9日研究会・総会「体力づくりについて」(県庁)、11月30日学校体育研究会「体力づくりについて」(佐原中)、1967年1月13日保健学習指導者講習会「労働と健康安全について」(県庁)、1967年3月機関紙発行であった¹⁹⁾(鈎括弧内は、研修・講習のテーマ、丸括弧内は、開催会場を確認できたもののみ示している)。

保健科教育に関する事業について、特記すれば、

前述した 1967 年 1 月 13 日保健学習指導者講習会「労働と健康安全について」(県庁)に加えて、1967 年 12 月 15 日保健指導者現職教育²⁰⁾(千葉市内 4 カ所)、1968 年 1 月 23 日学校保健学習指導者講習会²¹⁾「公衆衛生の効果的指導について」(千葉商業高校)、1968 年 12 月 11 日保健指導者現職教育²²⁾(千葉商業高校)、1969 年 2 月 5 日保健学習指導者研修会²³⁾(千葉県立中央図書館)、1969 年 12 月 15 日保健指導者現職教育²⁴⁾「公害研究と見学」(千葉商業高校)、1970 年 1 月 27 日保健学習指導者研修会²⁵⁾「保健の学習指導の実際について」(県庁)、1970 年 12 月 11 日保健教材研究会²⁶⁾「高校生の精神衛生について」「血清研究所の仕事について」「ワクチンの製造と副作用について」(式場病院、千葉県立血清研究所)、1971 年 1 月 20 日保健指導者講習会²⁷⁾「高校学習指導要領改正の要点について」「救急法」(県庁)、1971 年 12 月 10 日保健教材研究会²⁸⁾「解剖」(千葉大学医学部)、1972 年 1 月 25 日保健指導者研修会²⁹⁾「救急法」、1973 年 1 月 30 日保健指導者研修会³⁰⁾(佐倉東高校)、1973 年 3 月 13 日保健教材研究会³¹⁾(千葉大学)、があったことを確認する

ことができる(鉤括弧内は、研修・講習のテーマ、丸括弧内は、開催会場を確認できたもののみ示している)。

このように、保健に関する講演や研修・講習が年 1 回以上の頻度で千葉高校保体部会主催によって開催されていた。これらの保健科教育に関する事業は、千葉高校保体部会発足当時の保健学習の課題への取り組みであったと考えられる。

3. 1970 年前後における千葉高校保体部会の保健科教育の取り組み

3-1. 保健科教育に関する論考の整理

『保健と体育』(1967-1973)に掲載された保健科教育に関する論考をまとめた結果を表 1 に示す。千葉高校保体部会が 1967 年から 1973 年までに発刊した『保健と体育』に掲載された保健科教育に関する論考は、計 27 篇であった(1967 年 4 篇、1968 年 9 篇、1969 年 6 篇、1970 年 4 篇、1971 年 2 篇、1972 年 1 篇、1973 年 1 篇)。これらの論考を基に、千葉高校保体部会の取り組みについて考察する。

表 1 保健科教育に関する論考

タイトル	著者	号	頁	年
高校生の交通安全について	学校保健課	1	6	1967
講演要旨 労働と健康安全の効果的指導	東京教育大学教授 大塚正八郎	1	19-26	1967
保健学習に対する一私見	佐原高校 猪股俊二	1	50-52	1967
労働と健康安全の指導についての一考察	千葉商業高校 浅沼義明	1	56-58	1967
講演要旨 公衆衛生の効果的指導について	東京教育大学教授 大塚正八郎	2	9-17	1968
講演要旨 若年層の性病について	千葉中央保健所長 高塚太吉	2	17-24	1968
千葉県高等学校学校保健指導者現職教育に参加して	茂原農業高校 岩淵和子	2	68-69	1968
川端製鉄千葉製鉄所に於ける衛生管理の機構	川端製鉄千葉製鉄所医務課	2	70-71	1968
保健指導者現職教育について	事務局 篠崎兵衛	2	72	1968
高校生の貧血についての一考察	千葉商業高校 大塚吉男	2	73-75	1968
貧血について(保健委員会だよりから)	千葉女子高等学校保健委員会	2	75-78	1968
農村及び都市就業者に於ける 1 日の生活時間調査報告	八街高校 前田晴康他4名	2	78-84	1968
農村経営就業者及び都市就業者に於ける疾病等の調査報告	八街高校 穴戸進	2	85-93	1968
講演要旨 学校における性教育の正しいありかた	東京教育大学教授 大塚正八郎	3	2-13	1969
講演要旨 放射線による癌の治療について	放医研 藪本栄三	3	14-21	1969
保健学習の効果的な指導	佐原高校 猪股俊二	3	22-38	1969
保健学習における性教育の位置づけ(問題提起)	印旛高校 山崎岑生	3	38-44	1969
保健指導者現職教育に参加して	安房高校養護教諭 田村きみ江	3	78-79	1969
保健指導者現職教育について	篠崎兵衛	3	79	1969
講演要旨 公害の現況とその対策について	県公害課長 河野平	4	6-11	1970
講演要旨 千葉県公害研究所業務内容について	県公害研究所長	4	11-18	1970
保健学習指導者研修会に参加して	千葉女子高校 荒川昇	4	33-34	1970
保健学習指導者の姿勢	学校保健課補佐 藤森寿男	4	34-37	1970
講演要旨 高校生の精神衛生	式場病院院長 式場聰	5	11-14	1971
講演要旨 ワクチン製造と副作用について	血清研究所研究室長 松井清治	5	14-17	1971
保健学習の効果的なあり方	佐原高校 猪股俊二	6	30-48	1972
保健指導の一考察	千葉女子高校 穴戸進	7	29-31	1973

3-2. 千葉高校保体部会の取り組み

(1) 定期的な講演や研修・講習の取り組み

まず、前述したように、1972年を除き毎年掲載されている保健科教育に関する講演要旨や研修・講習参加記録にみられる保健科教育の取り組みは注目に値する。例えば、1968年の保健指導者現職教育³²⁾では、全国的に流行し、千葉県内の高校生においても問題になりつつあったシンナー遊びについての指導が実施されたことが把握できる。また、1969年の保健学習指導者研修会³³⁾においては、「保健学習が教科書中心で良いのか」³⁴⁾という現場教員の直接的な課題について議論がなされていたことが確認できる。このような保健科教育に関する講演要旨や研修・講習の参加記録から読み取ることができる具体的な講演、研修・講習の内容は、千葉高校保体部会発足当時の保健学習の課題に対する具体的な取り組みと捉えられる。

また、講演、研修・講習に参加することができなかった千葉高校保体部会の会員に対して、保健科教育に関する情報を共有することで、現場教員に対して保健科教育へ取り組む具体的な姿勢を提示する意図があったと考えられる。一方で、当時の保健体育教員の保健科教育に対する意欲が低いことを踏まえれば、現場教員が保健科教育について普段考えることが少ないため、機関紙を通してその機会を提供していた可能性もあったと考えられる。

一方で、保健科教育に関する講演要旨や研修・講習参加記録から、保健学習の課題に対する具体的な取り組みとして実施されていたものが、しばしば現場教員にとっては混乱を生む形があったことも読み取ることができる。言い換えれば、保健科教育に関する千葉高校保体部会の取り組みと現場教育との齟齬があった事例が確認できる。

例えば、性に関する問題について、大塚の講演要旨によれば、「性教育は臨床医学教育の場から出発したものであり、純潔教育は道徳面に基盤をおいた健康教育の領域から出発したもの」³⁵⁾と定義され、学校教育の中で性に関する問題を取り上げる時には、純潔教育を主体とし、その内容はモラルの確立、子どもの性疑問の解決、性知識の理解を中心に置くことと示されている。このことから、純潔教育の開始時期と内容、方法、教育の担当者、家庭との協力、教師の再教育といった具体的な性教育の方針が千葉高校保体部会内に共有されていたことが窺える³⁶⁾。しかしながら、現場教員から「保健を中心としてそれぞれの教科の内容にもられた性の内容があれば各教科の立場から学習し、重複する所があっても一向にかまわず、他教科での性教育をふまえての保健での位置づけがあれば指導の範囲が決めやすくなるのではないか」³⁷⁾と、性教育に関する指導上

の保健の立場と性教育における保健の重要性について、問題提起されている。以上のように、現場教員にとっては、性教育に対しての保健科と他教科の関係性についての明確化が最初の課題であり、講演で説明された内容はその次の課題として捉えられていたようである。必ずしも講演や研修・講習が、現場教育に沿った形で進められていたわけではなかった例の1つである。

(2) 高度経済成長による社会的変化への対応

次に、高度経済成長期において社会問題となりつつあった交通安全や労働と健康・安全に関する論考に着目すると、千葉県における高校生の交通違反状況について紹介している論考³⁸⁾、労働災害と職業病を例に挙げ、指導上のあり方について考えている論考³⁹⁾や学校の生徒とその家族を対象に労働と生活状況について実際に調査した結果を紹介している論考⁴⁰⁻⁴¹⁾などが確認できる。交通安全に関する論考については、保健体育を含む関連教科において指導の努力はなされているが、高校生の道路交通法違反が1年間で計2,014件と驚異的だと評価されており、「指導効果を妨げるものは何か、考えなければならぬこと」⁴²⁾と現場教育における実践課題が共有されていたことが把握できる。また、労働と健康・安全に関する論考については、「働くものにとっては、自己の労働力が唯一のものであるということ、そのもつで生みだす生命、身体がおびやかされることがあつてはならないということがあり、また自からが好ましい生活条件、環境をつくりだすよう努力せねばならないのである」⁴³⁾と労働者の健康課題に対する自主的な実践力と個人の健康課題ではなく集団の共有健康課題であるという認識の育成の必要性、現実の生徒を取り巻く環境と労働と健康・安全に関する指導を関連付けるための実態調査の結果などを千葉高校保体部会全体に共有していたことが窺える⁴⁴⁾。

以上のように、高度経済成長の影響を受け、社会問題となりつつあった交通戦争（交通事故発生数、交通事故死者数の増加）や高度経済成長期に見られた産業人の育成を課題として制度化された学校教育の実情⁴⁵⁾を背景に、現場教育に求められていた交通事故から生徒自身が身を守るための知識や能力の育成に重点をおいた安全教育や産業人育成のための労働教育を地域全体で共有・推進していくといった役割も千葉保体部会の取り組みの1つであったと考えられる。

(3) 猪股俊二による自主研究の萌芽

最後に、1967年、1969年、1972年に継続して掲載されている猪股の論考に着目すると、自作の「学

習ノート」についての紹介が特徴的である⁴⁶⁾。猪股は、「学習ノート」を、①保健学習で必ず習得させたい内容を精選すること、②図表や図式化した内容から理解度を高めるように配慮すること、③余白を取り記述できるようにすること、④自学自習でノートの単調さを克服すること、の4つのことに配慮し作成している⁴⁷⁾。また、猪股は、「学習ノート」を基に、医薬品を例に挙げて、医療問題や医薬品に関する子どもの保健認識調査を実施し、実践案を提案している⁴⁸⁾。その成果は、全国的な雑誌である高等学校保健体育連絡機関紙『月刊 保健体育教室』に掲載されている⁴⁹⁻⁵⁰⁾。さらに、猪股は、実践に対する評価の問題を取り上げ、「生徒の興味は何か、問題意識の実態はどうか。教材、教具の検討は十分だろうか。学習形態はどうしたら望ましいか」⁵¹⁾など、保健科教育に関する実践的課題を挙げている。猪股の実践は、千葉高校保体部会内の保健科教育に関する実践報告が極端に少ないことを踏まえると、個人の実践として高く評価でき、千葉保体部会内において、教員による保健科教育に関する自主研究の形を示した萌芽的な実践であったといえる。これは、千葉保体部会が継続的に取り組んできた保健科教育に関する取り組みの波及効果の1つであったと推察される。

4. まとめにかえて

本研究の目的は、千葉高校保体部会が1967年から1973年までに発刊した『保健と体育』に掲載された論考を対象として、1970年前後の千葉県という地域における千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みの一端を事例的に解明することを主眼とした。本研究の目的を達成するために、千葉高校保体部会の発足経緯と活動内容を整理し、『保健と体育』(1967-1973)に掲載された保健科教育に関する論考から、千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みを検討した。

まず、千葉高校保体部会は、千葉県高等学校体育連盟研究部内で共有されていた組織的な体育学習の課題と現状の保健学習の課題に対して、千葉県高等学校保健体育指導者の資質の向上および保健体育の振興を図ることを目的に、千葉県高等学校教育研究会の部会として1966年4月22日に発足した組織であった。一方で、1972年の終わりごろに、千葉高校保体部会は、財団法人日本学校体育研究連合会高等学校部会と関東地区高等学校保健体育研究会に所属することになり、地方から全国への組織的な発展を遂げた。そのため、1966年から1973年までにおいて、千葉高校保体部会は、千葉県内の高等学校における保健体育に関する研究(体育科教育と保

健科教育)の中心的な役割を担っており、『保健と体育』(1967-1973)は、その活動と成果を記録している資料として位置づけられる。

次に、千葉高校保体部会が1967年から1973年までに発刊した『保健と体育』に掲載された保健科教育に関する論考は、計27篇であった。これらの論考から1970年前後における千葉高校保体部会は、社会的課題に応じた教育内容の刷新、現場の課題に寄り添う研修体制の構築、自主研究による教育の質向上といった複数の側面から、保健科教育の充実を図ろうとしてきたことが確認できる。これらの取り組みは、教科としての保健だけでなく、子どもの生活や社会とつながる保健への転換を目指した、保健科教育に関する地域教育実践のモデルケースの1つとして捉えることができよう。

最後に、本研究の課題を示す。

第1に、本研究は、資料の限界上、1970年前後の千葉県における千葉高校保体部会の保健科教育の取り組みを事例的に検討するにとどまった。今後、資料(千葉県小中学校研究会保健教育部会の会報等)を発掘・整理し、小中学校や各学校等の実践を加えて、より重層的に分析する必要がある。

第2に、本研究は、1970年前後の日本の一部地域における保健科教育の取り組みの一端を明らかにした研究として位置づけることが可能であろう。しかしながら、本研究では、千葉高校保体部会が発刊した『保健と体育』(1967-1973)を研究資料として整理・提示することを中心としたため、1970年前後の千葉県における千葉高校保体部会の取り組みのみにしか言及できていない。今後、他の都道府県の保健科教育の取り組みも明らかにし、本研究の成果と比較検討することも課題としたい。

第3に、本研究は、千葉高校保体部会が1967年から1973年までに発刊した『保健と体育』を研究資料として提示した。所属組織を変えた後に、当該資料が継続して発刊されているかは、現時点で把握できていない。今後、『保健と体育』の継続号の発掘を試みたい。また、継続号が発刊されていなかった場合、それはなぜなのかも含めて検討していきたい。

謝 辞

本研究はJSPS 科研費JP25K06239の助成を受けたものである。

注

注1) 1981年5月に千葉県の高等学校保健体育科教員の資質の向上及び保健体育の振興を図ることを目的として発足した千葉県高等学校教育研究会保健体育部会とは、異なる研

究会であると考えられる。

- 注 2) 本研究では、「保健科教育」を小学校体育科保健領域、中学校保健体育科保健分野、高等学校保健体育科科目保健の意味で用いる。
- 注 3) 他に保健科教育を対象とした歴史研究として、藤田や沢山の目標論・教育論に関する研究、数見や小倉の通史的研究、反橋や小磯の性教育や喫煙等に関する学習指導要領の変遷に関する研究などがある。藤田和也：戦後保健教育論の系譜：文献整理・解題を中心に、一橋論叢，77，(1977) 100-107. 沢山信一：保健教育の目標論：科学的保健認識と自主的実践能力の検討，東京大学教育学部紀要，19，(1979) 237-247. 数見隆生：戦後教育の歴史的変遷。大塚正八郎，石河利寛編：新・保健科教育法，講談社，(1974) 38-52. 小倉学：保健教育の変遷。松田岩男，小倉学，高石昌弘編：健康と運動，第一法規，(1974) 113-124. 反橋一憲：戦後の小・中・高等学校保健体育科における性に関する教育内容の変遷：学習指導要領や同解説の検討を中心に，保健科教育研究，5，(2020) 15-31. 小磯透：体育科/保健体育科の学習指導要領や解説等における喫煙防止の内容の変遷，保健科教育研究，7，(2022) 43-66. 近藤雄大：1970年代「性と人間の生き方」に関する教科横断的保健授業の構想と実践の一事例：東京都立農産高等学校の「家庭科保健」を対象として，体育学研究，69，(2024) 199-212.
- 注 4) 千葉県内の小中学校の保健体育に関する研究(体育科教育と保健科教育)は、1965年に発足した小中学校体育研究会が中心的な役割を担っており、千葉高校保体部会が発足したことにより、千葉県における小中学校ならびに高等学校の一貫した研究体制が確立された。また、千葉県小中学校研究会保健教育部会(1967年に千葉県教育研究会保健教育部会に改称)は、会報の発行等を通して、小中学校の学校保健の推進を図っていた。千葉県教育委員会：千葉県教育要覧昭和41年度，千葉県教育委員会，(1967) 207-213..

参 考 文 献

- 1) 七木田文彦：健康教育教科「保健科」成立の政策形成：均質的健康空間の生成，学術出版会，(2010)。
- 2) 同上。
- 3) 近藤雄大：戦後初期における実験学校で展開された健康(保健)教育実践：愛知県岡崎市立六名小学校における事例，保健科教育研究，9，(2024) 50-58。
- 4) 同上。
- 5) 有間梨絵：戦後初期における東京都港区高輪台小学校の健康教育カリキュラムの開発，学校保健研究，63，4 (2022) 251-260。
- 6) 前掲3)。
- 7) 前掲5)。
- 8) 岡崎勝博：戦後保健科教育小史，保健科教育研究，1，(2016) 2-13。
- 9) 日本教科教育学会編：教科教育研究ハンドブック：今日から

役立つ研究手引き，教育出版，(2017)。

- 10) 藤森寿男：保健体育部会の発足経緯について，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，1 (1967) 82。
- 11) 同上。
- 12) 同上。
- 13) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，2 (1968) 153-161。
- 14) 鈴木九萬：序文，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，7 (1973) 1-2。
- 15) 千葉県教育行政二十年史編集委員会編：千葉県教育行政二十年史，千葉県教育委員会，(1969) 548-550。
- 16) 「千葉県教育行政三十年史」編集委員会編：千葉県教育行政三十年史，千葉県教育委員会，(1979) 670-673。
- 17) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，1 (1967) 83-84。
- 18) 同上。
- 19) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，1 (1967) 88-89。
- 20) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，2 (1968) 146-147。
- 21) 同上。
- 22) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，3 (1969) 99-100。
- 23) 同上。
- 24) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，4 (1970) 72-73。
- 25) 同上。
- 26) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，5 (1971) 52。
- 27) 同上。
- 28) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，6 (1972) 197-200。
- 29) 同上。
- 30) 千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，7 (1973) 124。
- 31) 同上。
- 32) 田村きみ江：保健指導者現職教育に参加して，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，3 (1969) 78-79。
- 33) 荒川昇：保健学習指導者研修会に参加して，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，4 (1970) 33-34。
- 34) 同上。
- 35) 大塚正八郎：講演要旨 学校における性教育の正しいありかた，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，3 (1969) 2-13。
- 36) 同上。
- 37) 山崎岑生：講演要旨 学校における性教育の正しいありかた，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，3 (1969) 38-44。
- 38) 学校保健課：高校生の交通安全について，千葉県高等学校

- 教育研究会保健体育部会編：保健と体育，1（1967）6.
- 39) 浅沼義明：高校生の交通安全について，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，2（1968）56-58.
- 40) 前田晴康,西群順子,江波戸義太郎他：農村及び都市就業者に於ける1日の生活時間調査報告，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，2（1968）78-84.
- 41) 宍戸進：農村経営就業者及び都市就業者に於ける疾病等の調査報告，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，2（1968）85-93.
- 42) 前掲38).
- 43) 前掲39).
- 44) 前掲40).
- 45) 小国喜弘：戦後教育史，中公新書，(2023).
- 46) 猪股俊二：保健学習に対する一私見，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，1（1967）50-52.
- 47) 同上.
- 48) 猪股俊二：保健学習の効果的な指導，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，3（1969）22-38.
- 49) 猪股俊二：保健学習の効果的指導(1)，月刊保健体育教室，19（1968）5-9.
- 50) 猪股俊二：保健学習の効果的指導(2)，月刊保健体育教室，22（1969）12-16.
- 51) 猪股俊二：保健学習の効果的なあり方，千葉県高等学校教育研究会保健体育部会編：保健と体育，6（1972）30-48.